

モードは語る

中野 香織

6月12~14日にロンドン・ファッションウィークが開催された。新型コロナウイルスによるニューノーマル後、世界初のファッションウィークで、全てデジタル形式であり、誰でも無料でアクセスできた。

各ブランドがコレクションを展開する場になったばかりではない。舞台裏の光景、識者による議論、音楽、教育、ショッピング、さらにはロンドンの博物館や劇場への関心にも応えるようにプラットフォームが作られた。先鋭的センスと幅の広さが感じられ、デジタル版の未来の可能性をたしかに示していた。

デジタル形式のショー

欠点や面倒にこそ生命力



ファッションウィークのホームページの一部

デジタル版になって良かった点は、ジャーナリストやバイヤーが大移動する必要がないので、炭酸ガス発生が大幅に削減できること。待ち時間なく、各プレゼンテーションを

見ることができること。さらに全世界の人が無料でアクセスできるので、偏狭なファッションエリート主義が廃されたことなど。ブランド側としても、最前列に誰を座らせるかなどに頭を悩ませる必要がなくなり、内容に集中できたはずである。

3日間を終え、デジタル版によって改善された多くの点を認めた。その上で思ったことは、かつてのリアルなショーの「欠点」や「面倒」にこそモードの生命力が宿っていたということだ。

なかなか始まらないショーを待つ期待と立ち。最前列に並ぶ「エ

リート」たちの虚栄の火花を見るひそかな快感。観客の熱気や香水が生む匂い。英国女王が参加するというハプニングの興奮。喝采にあいさつをするデザイナーの笑顔や涙がもたらす感動。ショー後の会場での予期せぬ出会いが生む喜び。ショーの内容以外の要素がかきたてる鮮烈な感情に、同時代に生きることの実感を覚えたものだが、デジタル版には皆無だった。無観客試合で似た思いを抱く人も少なくないのではないか。

感傷的になっているわけにもいかない。続くパリ、ミラノのウィークもデジタル版となる。ニューノーマルの世界でどう感情を動かし、同時代的な意味を共有していくのか。受け手もまたリセットを求められる。

(服飾史家)